

## 1. 要 旨

この調査では、石川県小松市と加賀市から福井県あわら市にわたる小松・加賀・あわら地区(約 437k m<sup>2</sup>)を対象として、湖沼調査、土地利用調査、地形分類調査を実施しました。

### (1) 湖沼調査

湖沼調査では、地区内の北潟湖、柴山潟、木場潟の3湖沼の地形・底質・水中植物を調査し、次の結果を得ました。

- 1) 北潟湖の最深部は開田橋の水門のすぐ南にあり、3.7m、柴山潟の最深部は新堀川へ流出する濬筋にあり、4.5m、そして木場潟の最深部は中央部北寄りにあり 4.5mである。
- 2) 底質は3湖沼とも全体的に泥となっており、北潟湖と柴山潟では海や川に流出する所と一部の流入河口付近で砂となっており、木場潟では流入河口付近が、泥混じり砂、砂混じり泥となっている。
- 3) 水中植物は、北潟湖では西南部の一部にヒシが生育しており、柴山潟では主に西北部の湖岸沿いにガガブタが見られ、流入河口付近にはコウホネが生育している。木場潟では水中植物はほとんど見られず、湖岸沿いに挺水植物のヨシ等が所々に生えているだけである。

### (2) 土地利用調査

土地利用調査では、1969(昭和44)年、1986(昭和61)年、2000(平成12)年前後の3時期の地形図を用いて小松・加賀・あわら地区の土地利用とその変化を調査し、次の結果を得ました。

- 1) 調査地域においては、森林が少しずつ減少してきてはいるものの、3時期とも全体に占める割合が一番多く5割以上である。
- 2) この地区はゴルフ場の増加が著しく、1969年から1986年にかけては約4倍、1986年から2000年前後にかけては約2倍の面積になっていること。また、そのほとんどが森林からの変化によるものである。
- 3) 3時期の土地利用項目間の変化を調べると、1969年から1986年にかけて、年平均0.63km<sup>2</sup>の割合で田から都市集落及び道路・鉄道等へ変わっており、また年平均0.38km<sup>2</sup>の割合で森林から都市集落及び道路・鉄道等へ変化しており、2000年前後にかけても、割合は小さくなりますが、この傾向は継続されている。

### (3) 地形分類調査

地形分類調査では、小松・加賀・あわら地区の地形を山地・丘陵、台地・段丘、低地、湖沼の4つに類型化し、それぞれの地形の特徴を把握して地形分類図にとりまとめ、次の結果を得ました。

- 1) 小松・加賀・あわら地区の西北側は海岸線に沿ってほとんどが砂丘で連なり、東南側には山地や台地が分布し、最北部を梯川(かけはしがわ)が流れ、北潟湖、柴山潟、木場潟周辺には更新世の段丘が形成されている。
- 2) 地形と土地利用の関係をみると、小松市街地は、低地の微高地である完新世の砂堆上に立地していますが、加賀市の大聖寺市街は、低地に盛土して立地しています。更新世の段丘面は主に施設園芸を含む畑地や水田として、また低地は水田として利用されている。